

『バビロン天文日誌』 およびその関連史料に見る、
新バビロニア時代以降の食糧危機

Food Crises in the Middle and Late First Millennium BC Babylonia:
An Analysis of Babylonian Astronomical Diaries and Related Texts

三津間 康 幸
Yasuyuki MITSUMA

Abstract This study uses a group of the Akkadian cuneiform texts, the Babylonian Astronomical Diaries, and related historical documents as its main source and examines the relationship between the recorded famines and other food crises and the various events that occurred before and after the crises. I will further evaluate the impact of the crises, using barley prices (equivalents with one shekel of silver) recorded in the Diaries and in the list of prices published by Slotsky and Wallenfels [2009]. Equivalents of dates recorded in the Diaries are also used as an auxiliary comparative materials. I will not simply use the commodity prices for judging the existence of famines, but consider the impact of food crises and similar events that are specifically described and recorded in the texts, taking into account the price of barley (and dates) in the same period. The Diaries and the related documents provide many historical descriptions of the food crises from the Neo-Babylonian (626/625–539/538 BCE), Persian (539/538–331/330 BCE), Seleucid (305/304–141/140 BCE), and the Arsacid (141/140 BCE–224 CE) periods. In this paper, 48 examples are extracted and tabulated, and individual cases are analyzed.

This analysis demonstrates that social and food crises do not necessarily synchronize political upheavals such as dynastic changes. The food crisis during the Diadochi Wars (Cases 10 and 11) and that caused by the uprising of the Arabs are easy to understand as results of conflicts in Babylonia. However, the food crises caused or aggravated by the wars outside Babylonia, and the water supply problem caused by population growth are rather problems caused by the ruling powers and the society itself. This shows us how one-sided it is to attribute the causes of crises to external factors alone and how necessary to consider internal factors. This applies to the analysis of contemporary crises as well.

Keywords Babylonian Astronomical Diaries (バビロン天文日誌), barley (大麦), dates (ナツメヤシ), Diadochi Wars (ディアドコイ戦争), Syrian Wars (シリア戦争)

は じ め に¹⁾

歴史学者ユヴァル・ノア・ハラリは2018年に翻訳された著書の中で、21世紀の人類は飢餓、疫病、戦争の三大苦を抑え込みつつあり、不死と幸福と神性を手に入れることを次なる目標とするであろうと予想した[ハラリ 2018: 9-33]。

しかし本稿を執筆している2022年末の時点で判断する限りでは、このような予想はかなり説得力を失ってしまったように思える。2019年からのコロナ禍、2022年のロシアによるウクライナ侵攻、そしてそれによって惹起されつつある食糧・エネルギー危機が、このような楽観的な予想を吹き飛ばしてしまった。再び疫病と戦争と飢餓に直面した世界の行く末を考えるためには、やはりこの3大苦についてさらに考察を深めることが必要である。

イスラエルの学者ハラリが飢餓、疫病、戦争の3つをこれまで人類が直面してきた主要な危機ととらえた根源には、『旧約聖書』の記述があると推測される。「剣と飢饉と疫病」は、とくに新バビロニアによるバビロン捕囚に直面した預言者エレミヤ、エゼキエル、そしてその後の歴代誌史家にとって切実な問題であり、彼らの書物の中でこの3者はしばしば一組で言及される[代下 20: 9; エレ 14: 12, 21: 7, 9, 24: 10, 27: 8, 13; 29: 17, 18; 32: 24, 36; 34: 17; 38: 2; 42: 17, 22; 44: 13; エゼ 5: 12, 6: 11, 12, 7: 15, 12: 16, 14: 21]。エレ 21: 7にはエルサレムについて「私はユダの王ゼデキヤとその家臣とその民と、この都で疫病や剣や飢饉から逃れて生き残った者とを、バビロンの王ネブカドレツアルの手、敵の手、命を狙う者の手に渡す」という預言があり²⁾、エゼ 5: 12には「都の三分の一は疫病で死ぬか、飢餓によって滅ぼされる。三分の一はあなたの周りで剣に倒れ、三分の一は私が四方に散らし、剣を抜いて彼らの後を追う」という預言がある。さらにこういった預言を踏まえ[佐竹 2009: 279-293 参照]、黙 6: 8には「彼ら(筆者注: 「死」と陰府)には、剣と飢饉と死と地の獣とによって、地上の四分の一で人々を殺す権威が与えられた」という終末の幻が展開されている。

筆者は新バビロニアの都でもあったバビロンでもっぱら作成されたアッカド語楔形文字史料『バビロン天文日誌』[ADART 1-3; 以下『日誌』と呼称]に見られる疫病、病、飢饉、大量死、人身売買の記述を表にまとめ、さらに前108/107年における衛生・社会危機の高まりについて分析した[三津間 2021]。またこの危機について2021年の第67回国際アッシリア学会でも発表し、その成果を発展させて同学会プロシーディングスに投稿中である。『日誌』は、現在判明している限りでは前7世紀から前1世紀にかけてバビロンのエサギル神殿に奉職する学者たちによって継続的に作成されていた史料で、月ごとの天文事象・天候、農

1) 本稿の作成に当たっては、JSPS 科研費 JP22K00921 の助成を受けた。また筆者が撮影した『バビロン天文日誌』の写真も適宜参照したが、その撮影を許可された大英博物館理事会に感謝したい。また本稿の執筆と並行して ADART 4 が出版されたが、その内容を盛り込んだ成果は後日を期すこととしたい。

2) 聖書の引用および書物の略号は聖書協会共同訳[2018]による。

畜産物の価格、ユーフラテス河の水位の変動、歴史的イベントが記録されている。記録された大麦等の価格推移は³⁾、バビロン周辺の社会・経済状況の指標として利用することができる。また、観測された天文、天候等のデータと並行して記される、歴史的イベントの記録も発生とはほぼ同時代に記録された、価値の高い史料として扱ってよいと思われる。

本稿では前 108/107 年の危機に焦点を当ててきた旧稿の中では十分に扱えなかった、飢饉を含めた食糧危機を取り扱ってみたい。『日誌』には飢饉の記述のみならず、食物や水に関する様々な問題が記されている。本稿では「食糧危機」という名称でこういった問題を一括してとらえ、分析を試みる。ロシュバークは『日誌』にある飢饉などの事件記述に、予兆占星術のコパス『エヌマ・アヌ・エンリル』にある帰結節の記述と驚くべき類似を示すものがあることを指摘した [Rochberg-Halton 1991: 330-331]。『エヌマ・アヌ・エンリル』は版によって異同があるが、粘土板 70 枚ほどからなるシリーズで、前 11 世紀までにはある程度完成していた [Koch-Westenholz 1995: 78]。その中には 6500-7000 にもなる天文予兆占いが集成され、各占いの文章は前提節に天文事象を、帰結節にそれに続いて起こると思われる事件を記している。新アッシリア帝国末期には「占星術レポート」として、『エヌマ・アヌ・エンリル』の天文予兆占いの文章をそのまま用いて王に特異天文事象の観測や予測される出来事を通知する文書が多数作成された [Rochberg 2004: 224]。アッシリアの支配下にあったバビロニアの学者もこのような文書の作成に携わった。それゆえ新アッシリア時代末から作成された『日誌』の事件記述の中にも、おそらくは占星術文書の帰結節の内容がほぼ変えられずに使われている部分が存在すると推測される。そのため『日誌』の解釈に当たっては、小規模な食糧不足等に予兆占星術の定型的帰結節の内容が投影されて「飢饉」などとして記録されている可能性も考慮しなければならない。

そこで本稿では、『日誌』に記された飢饉などの食糧危機とその前後で起こった諸事件との関係を考察し、さらに危機のインパクトを、その前後の時期に『日誌』に記される大麦価格（銀 1 シェケルとの対価）や、スロットキーとウォレンフェルス [Slotsky & Wallenfels 2009] によって公刊された、ハカーマニシュ朝時代以降の対価リストの大麦対価との比較から明らかにしたい。また『日誌』に記載されたナツメヤシの対価も補助的な比較材料として用いる。『日誌』には大麦やナツメヤシ以外にごまや羊毛の対価も記載されているが、ピルングルーバーが指摘するように [Pirngruber 2014: 165]、大麦対価のデータは最も多く残っている。また大麦は、通常の収穫の時期がバビロニア暦のⅡ月に相当することが判明している。そして大麦は最も主要な食品でもあった。塩害に強い大麦は、メソポタミア南部ではウル第 3 王朝時代までに公共耕地の 98% で栽培されるようになっていたという [古谷野 2004]。こうした条件から、大麦の対価はバビロニア社会に及ぼす影響が大きく、食糧危機のインパクトを評価するための指標として適当で扱いやすい。大麦対価だけでは十分な比較

3) 『日誌』における大麦等の価格推移については春田 [1989] を参照。

材料が得られない場合、あまり煩雑にならない範囲で『日誌』のナツメヤシ対価も参照するが、ナツメヤシも大麦と並ぶ主要作物である。シュメールやバビロニアで古くから栽培が行われ、炎天や塩害に強い。夏期に結実し、新しいナツメヤシは秋に市場に出回った [岡田 2004; Pirngruber 2017: 75]。

すでに前 385/384 年以降の『日誌』に現れる対価を一覧表にまとめたものとしてファン・デル・スペクの研究 [van der Spek 2005] があるので、本稿ではこれを参照し、特に重要な部分は『日誌』[ADART 1-3] も参照する。対価リストは Pirngruber [2015: 378-379] によれば『日誌』を資料として作成されたもの、あるいはリストと『日誌』の間には共通の資料があるものと考えられ、『日誌』とともにバビロン周辺の対価を示すものとして活用できる。対価の数値は大きいほど、購入しやすく安価ということに基本的にはなる。

『日誌』の(大麦)対価と食糧危機・社会危機を結び付けて考える大部の先行研究のうち Vargyas [2001: 59-130] は対価の変動を中心に考察しており、また Pirngruber [2017: 164-216] は戦争や反乱、軍事遠征や軍隊の駐留の物価にもたらす影響を統計学的、総合的に論じている。特に Vargyas [2001: 90] は夏期の大麦対価 36 リットル未満の場合を飢饉があった年と判断している。しかし本稿では対価に基づいて「飢饉」の存在を判断するのではなく、むしろテキストに具体的に描写・記録された食糧危機やそれに類するものについて、個別的に同時代の大麦などの価格を考慮してそのインパクトを考察してみたい。『日誌』およびその関連文書からは新バビロニア時代(前 626/625-539/538 年)以降、ペルシア帝国(前 539/538-331/330 年)、セレウコス朝(前 305/304-141/140 年)、アルシャク朝(前 141/140-後 224 年)のバビロン支配期の食糧危機の記録が得られる。記録された事件の年代は前 612/611 年から前 76/75 年に及び、先述したバビロン捕囚と同時代からそれ以降ということになる。新バビロニア時代には政治的にバビロンの重要度が増し、セレウコス朝、アルシャク朝時代にかけてバビロニア周辺では人口が増加し居住地が拡大する [Pirngruber 2017: 26-27]。こうした状況のもとで、主にバビロニアにおける食糧危機がどのような場合に、どのような形で起こるのかを、以下の章では考察していきたい。

I 食糧危機への言及

まず史料として、『日誌』中の食糧危機の事例を抽出するほか、『日誌』に関連する文書にある食糧危機の記述も付け加えて表 1 に示す。この中には水に関する記述も多く含まれているが、水は飲料としてだけでなく、農業生産にも大きな影響を与えるので、食糧の問題と切り離すことはできない。一方蝗の出現という現象は——農業生産へ影響を及ぼしかねない事象ではあるが——すでにピルングルーバーが集中的に扱っている [Pirngruber 2014]。またラクダ遊牧民「アラブ」の前 2 世紀後半の活動もバビロニア社会に与えた影響は大であったと思われるが、ピルングルーバーの別の論文で総合的に扱われている [Pirngruber

表1 『バビロン天文日誌』および関連史料に見る食糧危機

№	史 料	統治者	年月日	事 項	備 考
1	ADART 5: No. 5 'Obv. I 17'	ナボポラッサル	-611(?) x	飢饉が起こる	
2	ADART 5: No. 5 'Obv. II 3'	ナボポラッサル	-610 x	飢饉	
3	-373B Upper e. 1	アルタクシャサ II世	XII x	飢饉が邦で起こる。民が〔彼らの子を (?)売る(?)〕	
4	-369 'Obv.' 5'	アルタクシャサ II世	XI x	氾濫が途絶える	月は van der Spek [2005] 参照
5	-346 Rev. 33	アルタクシャサ III世	XII 同月	氾濫が途絶える	
6	-346 Rev. 33	アルタクシャサ III世	同年	大麦の収穫が <i>samānu</i> に犯される	XII月のセクションの末 尾に記載
7	-342A Obv.' 13	アルタクシャサ III世	I 22 夜	大麦のパンのごときパンへの言及	
8	-324B 'Obv. 12'-13'	アレクサンドロス III世	5日まで	バビロンの街路で大麦と全てのものの 取引が途絶える	
9	BCHP 1 Rev. 5'	アレクサンドロス III世	x	ユーフラテス / シッパル、その水 / 子 らへの言及	年代は BCHP の注釈 参照
10	BCHP 3 Col. 4 29'-30'	アレクサンドロス IV世 (セレウコス)	-309 同年	大麦 (の対価) 1 sūt ; ナツメヤシ (の 対価) への言及。何かが不法に (?) 取 得される	
11	BCHP 3 Col. 4 32'-33'	アレクサンドロス IV世 (セレウコス)	-308 x	「アッカドの [知事]」がボルシッパへ 行く。大麦 (の対価) 1 sūt	
12	BCHP 5 Rev. 1 f.	セレウコス I 世	x 同[月] 28'	水がどこかに入る	
13	-273B Upper e. 1	アンティオコス I 世	-274 同年 (?)	飢饉がアッカドで起こる。民が彼らの子 を売る。民が嘆きのうちに (<i>ina ṣ[i-i]h- tum</i>) ⁴⁾ 死ぬ	翌年 VII-XII 月の『日誌』 の最終セクションに記 述
14	-270B 'Rev. 19'	アンティオコス I 世	同年	鳥が多い。ニンニク (?) 4 リットルが 銀 (?) 1 シェケル	XII月のセクションの末 尾に、他の農産物とは 別に記述
15	-261B 'Obv.' 2'	アンティオコス I 世	VIII x	セレウコスに関係する複数の者がアッ カドにおいて耕地を占拠し取り巻く	
16	-253 Obv. A ₁ 8-A ₂ 1'/B ₁ 4'	アンティオコス II世	VII 同月	ナツメヤシがバビロンの市場から途絶 える	
17	-249B 'Rev.' 14'	アンティオコス II世	XI 同[月]	雨が途絶える	
18	-232 Obv. 38	セレウコス II 世	IX 同月	大洪水が来る	
19	-164B 'Rev.' 15'	アンティオコス IV世	XII 25, 26	大麦の取引が途絶える	月は ADART [2:494] にしたがう
20	-161A ₁₊₂ 'Rev.' 10'-12'	アンティオコス V世	VI x	民が何かを飲む。邦に何かが蔓延する	
21	-153 'Rev.' 4'-5'	デメトリオス I 世	V 同月	畜牛の間に <i>di'u</i> 病	
22	-149A 'Rev.' 3'-4 f.	デメトリオス I 世	III x	塩海 [沿いの] アンティオケイア ⁵⁾ に おける大飢饉、軍隊への言及	伝聞情報
23	-137A 'Rev.' 4 f.	ミフルダート I 世	IV 同月	畜牛の疫病 (<i>miqittu</i>)	
24	-137A 'Rev.' 7'	ミフルダート I 世	IV x	スサとエラムの諸市で飢饉が起こる	

4) *ṣiḥtu* 「悲しみ、嘆き」の意味は [CDA: 338; Veenhof 1975-1976: 107-110] 参照。5) 地中海から近距離にある、オロンテス河畔のアンティオケイアのこと。この地名の解釈につ
ては van der Spek [1997/1998: 168-169, 173-174] 参照。

表1 『バビロン天文日誌』および関連史料に見る食糧危機（つづき）

№	史料	統治者	年月日	事項	備考
25	-136B 'Obv.' 11'	フラハート II 世	VIII 同月	雨が途絶える	
26	-129A ₂ 'Obv.' 19f.	フラハート II 世	II 同月 17	「將軍」の使[者] 1 名がエラムの収穫 (について知らせる?)	
27	-125A 'Obv.' 12	アルタバーン I 世	I 同月	ニンニク (?), エシャロット, すべての <i>ma-hal-tū</i> 作物が高価	
28	-125A 'Obv.' 16-17	アルタバーン I 世	I x	ナグラ河 ⁶⁾ と呼ばれるもののなかから 上った[アスバ]シネーの[軍勢(?)] が, 収穫物を運び(去る)	
29	-122A 'Obv.' 8'	アルタバーン I 世	同年 収穫期	大麦に <i>samānu</i> がつく	I 月のセクション末尾 に記載
30	-117B 'Rev.' 5'	ミフルダート II 世	XI x	複数の者が炒った大麦, パン(?) を食 べ, 死ぬ。ある子への言及	
31	-111B 'Rev.' 12'	ミフルダート II 世	記載なし	アッカドの牛の間で <i>di'u</i> 病	
32	-111D 'Obv.' 15'	ミフルダート II 世	III 同月	以前の如く畜牛の疫病 (<i>miqittu</i>)	
33	-110 'Rev.' 13'	ミフルダート II 世	V x	シルトで何かが満たされる。太陽が何 かを見る。何かの上流への言及	水位と関係か
34	-108A 'Obv.' 30'	ミフルダート II 世	II x	何かが大水の上に出る	
35	-108A 'Obv.' 30'	ミフルダート II 世	II 5	泥, 木, 葦への言及	直前の事例 34 と関係か
36	-107D 'Obv.' 31'-32'	ミフルダート II 世	IX 22 まで	バビロンの街路での売りが停止する	
37	-107C 'Rev.' 15'	ミフルダート II 世	同年	雨と氾濫が途絶える	
38	-107D 'Rev.' 21'	ミフルダート II 世	XI 同月	雨が途絶える	
39	-103A 'Flake' 13'	ミフルダート II 世	II 同月	魚の産出が非常に減少する	
40	-87A 'Rev.' 29'-30'?	ゴータルズ I 世	VII 同(?)月	水への言及。井戸の水と関係する, 単 数のものの上の何かへの言及	
41	-85B 'Flake' 6'	アルシャク	VI x	「邦の[民]」が良くない水を飲む	
42	-85C ₁ 'Rev.' 14	アルシャク	X x	雨と氾濫が途絶える	
43	-77A 'Rev.' 29	ウロード I 世	V 1-月 半ば	河の水が赤茶け濁る	
44	-77B 'Rev.' 17'	ウロード I 世	XI [同月(?)]	[雨(?)] と氾濫が途絶える	
45	-75 'Rev. 7'	ウロード I 世	IX(?) x	以前の如く河に関する何か ([...] 'x' ID)	
46	BM 34433:3'	デメトリオス I 世(?)	x	単数の者が定めた 1 sūt 梃などへの言 及	年代は BChP の注釈 を参照
47	BChP 19 Rev. 12'-14'f.	アルシャク朝	x 同月(?)	「(4 將軍の上に立つ) 將軍」が多くの 「王の軍勢」を(招集?)。灌漑された耕 地を再び囲む。海の灌漑された耕地の 岸の何かを脅かす	年代は前 110 年代半ば 以前 [Mitsuma 2010]
48	BM 35269+ 35347+35358 'Obv.' 10'	ミフルダート II 世	x 同月	雨と氾濫が途絶える	

6) ^{id}*Na-ag-ra-a*. 位置を同定することは困難であるが, メセネ王アスパシネーとの関連から, ペルシア湾岸方面にあったと推測できる。ブトレマイオスの『地誌』6: 7: 37 には, アラビア・エウダイモンの内陸部にある都市の一つにナガラ *Nagara metropolis* があると記録されている [Ziegler 1997]

2016]。そこで蝗や「アラブ」についての記述はここでは割愛し、後段の分析で適宜言及することにする。

表1「史料」欄に-nとして示した史料はADART [1-3] に刊行された『日誌』の粘土板である。-nという数字は天文学的紀年法により、原則的に粘土板上の記録がカバーする年代を示している。この紀年法は西暦（ユリウス暦）と異なりゼロ年を持ち、紀元前1年が0、紀元前2年が-1に対応するが、さらに『日誌』粘土板の番号として用いられる-nは各ユリウス暦年の春に始まるメソポタミア標準暦の年を示していることに注意しなければならない。つまり、『日誌』粘土板-373Bに記された事件は、ユリウス暦で紀元前374年の春に始まり、前373年の春に終わるメソポタミア標準暦の1年に属することになる。同じ年に属する粘土板が複数ある場合、カバーする日時の早い方から順にアルファベットが付される。このように『日誌』粘土板の番号は原則的にそこに書かれた事件の年代を示しているので、『日誌』からの事例については表1「年月日」欄の年表記を省略し、例外となる事例13や、『日誌』以外からの事例で年代が決定しているものには、事件が起こったメソポタミア標準暦年の始まりが位置するユリウス暦の年を天文学的紀年法で示す。事例13は前274/273年ではなく、その前年に位置することになる。また「年月日」欄で標準暦の月名を示す際にはニサン=Ⅰ、アヤル=Ⅱとローマ数字で表記し、下付きの₂をⅥ₂, Ⅻ₂のような閏月を示すのに用いる。

『日誌』以外の史料から得られた事例は1, 2, 9, 10, 11, 12, 47である。まず事例1, 2を記す粘土板[ADART 5: No. 5]は大英博物館所蔵のBM 38357 (1880, 1112.239)であり、同館の登記簿では「バビロニア」由来とされる[Leichty, Finkel & Walker 2019: 381, 389]。この史料は月食などを記録しており、『日誌』の抜粋と考えられている[Hunger & Pingree 1999: 156]。事例10, 11はいわゆる「ディアドコイ年代誌」[ABC: Chronicle 10=BCHP 3]にある大麦対価の記録である。この年代誌は少なくとも前319/318年から前309/308年までをカバーしており、アレクサンドロス大王死後のディアドコイたちの争いの記録として価値が高い。事例9, 12, 47はその他の、BCHPに公表された「バビロニア年代誌」から得ている[ABC: Chronicle 8=BCHP 1; ABC: Chronicle 11=BCHP 5]。また事例46や48はADART [1-3] に公刊されなかった『日誌』粘土板断片に由来する。BM 34433はBCHPの中に翻字・英訳が示され、BM 35269+はMitsuma [2019b]によって一部の翻字・英訳が公表されている。事例48の『日誌』は、前96/95年Ⅰ月から前91/90年Ⅷ月の間に年代づけられる[Mitsuma 2019b: 303]。『日誌』やハカーマニシュ朝時代末期以降の「後期バビロニア年代誌」[ABC: Chronicle 9および、BCHPに入っている年代誌]はともにバビロンのエサギル神殿に奉職し、その内部事情にも通じた学者たちによって作成されたことを考慮すると[三津間 2017: 38, 43]、史料に記載された出来事は、場所の特記がなければバビロン

↙ 1998: 118]。これは一説によればイエメンとの国境に近いサウジアラビアのナジュラーンに比定される[Hoyland 2001: 169]。

周辺で起こったものと思われ、KUR「邦」という場所が示されている場合はアッカド即ちバビロニアの出来事ということになる。KUR (URI^{ki})「(アッカドの) 邦」はディアドコイ時代やセレウコス朝・アルシャク朝時代の『日誌』や「年代誌」の中で属州「知事」(¹⁰GAL. UKKIN / ¹⁰*mu-ma-'i-ir*) の管轄範囲として言及されるので (三津間 2004: 98-101: 表 1 参照; KUR URI^{ki} の表記は例えば *ADART* 1: 344 を参照; ディアドコイ時代の事例は例えば *BCHP* 3 Col. 1 29 参照), KUR「邦」は都市バビロンを含むバビロニア属州を指す省略的な呼称と判断できる。また粘土板に欠損などがあって出来事が起こった場所の記載があったかどうかかわからないような場合も、それがバビロン周辺やバビロニアで起こった可能性はかなり高いと言える。

II 各事例の分析

ここでは表 1 に掲げた諸事例について、『日誌』や「年代誌」の歴史記事も参照してその背景を明らかにし、同時代の『日誌』や対価リストから得られる大麦価格や、『日誌』から得られるナツメヤシ価格と比較して危機のインパクトを明らかにしていく。事例 1 の飢饉は粘土板 [*ADART* 5: No. 5] の表面第 1 欄 [¹Obv. I] の末尾, 17' 行に書かれている。¹Obv. I 欄の残存部分は 17' の下に仕切り線がある以外には区切りがないので、同欄 (残存部分) は 1 セクションを為していると判断できる。同欄 4'-10' は前 612/611 年の月食を記録しているので [*ADART* 5: 25], セクション末尾, 事例 1 の飢饉の記述は同年の出来事を記したものと考えられる。動詞 *GAR-an* の前には何も地名表示がないので、飢饉は (先述の通り *ADART* 5: No. 5 の粘土板がバビロニア由来であることを考慮すれば) バビロニアで起こった可能性が高い。

事例 2 は同じ粘土板の表面第 2 欄 [*ADART* 5: No. 5 ¹Obv. II] の上方のセクションに書かれ、やはり飢饉を記録している。大英博物館が提供する粘土板の写真 [https://www.britishmuseum.org/collection/object/W_1880-1112-239] を見ると、「飢饉」の語に続く動詞 *GAR* は消された形跡があるが、その前にはやはり地名の表示がなく、飢饉はバビロニアで起こった可能性が高い。3' 行のすぐ下には仕切り線が引かれ、その下方のセクション冒頭には (ナボポラッサル) 治世 16 年 (前 610/609 年) の表示があるので [*ADART* 5: No. 5 ¹Obv. II 4'], 上方のセクション末尾の飢饉の記述は治世 15 年 (前 611/610 年) の出来事を記したものと考えられる。

前 612/611 年 (ナボポラッサル治世 14 年) はアッシリアの首都ニネヴェが新バビロニア軍とメディア軍によって陥落した年であり [*ABC: Chronicle* 3: ll. 38-46], 外征や戦争捕虜の流入のために食糧が大量に必要なことによって飢饉が起きたとも考えられる。実際、バビロニア年代誌 *ABC: Chronicle* 3 [l. 49] にはこの年に「ルサブ (の民) がアッカドの王の前に、ニネヴェに送って来られた」とあり, *ADART* 5: No. 5 [¹Obv. II 6'] には前 610/

609年Ⅲ月のこととして「ルサブから捕虜 [...]」という記述があり、ニシビスに近い地域ルサブの捕虜が新バビロニアの本拠であるバビロン方面に送られていったことを示すのかもしれない⁷⁾。ただし送られた捕虜の規模などは不明であるし、前610/609年にルサブの捕虜がバビロン周辺に到着したとすれば、彼ら自体は前612/611年と翌年に確認できる飢饉の原因とはなりえなかったことになる。またこの飢饉がどれほどのインパクトを伴ったかも、同時代の『日誌』あるいは対価リストがないため判断することができない。ADART 5: No. 5 [‘Obv. I 13’-15’] は前612/611年のⅨ月、Ⅹ月、Ⅺ月に、デールやニップルの知事たちが死亡したことを伝えている。粘土板左端は欠損しており、その部分にも地名の限定符であるKIサインが残っているので(14’, 15’), 他の土地の高官の死亡にも言及があったのであろう。3か月の月名がそれぞれ挙げられていることは、毎月少なくとも一人、計3人以上の人物が死亡したことを示唆する。少なくとも三都市かそれ以上の場所で高官が同時期に死亡した可能性がある。また粘土板[ADART 5: No. 5]の同じセクションにはⅡ月にも複数の者が死亡したことが伝えられている[‘Obv. I 16’]。デールやニップルの事件と同年の出来事とも思われるが、同じセクションの中でもⅡ月までに起こった前者の事件よりも後方に書かれているので、後者の記述は年を越して前611/610年Ⅱ月まで高官などの死亡が引き続いたことを示しているのかもしれない。これらは事例1, 2の飢饉と関係して起こった事件とも思われるが、前612/611年や前610/609年の月食[ADART 5: No. 5: ‘Obv. I 4’-10’; ‘Obv. II 7’-15’]という凶事に対する占星術的な関係を発見するために同時期の特筆すべき事件を記録しているだけで、飢饉とは直接的な関係はないとも考えられる⁸⁾。

事例3の飢饉は「邦」(KUR)で起こったと明示されているので、バビロニアでの出来事と判断できる。年末のⅫ月のセクションに記載されているが、年間を通しての状況を示しているのかもしれない。「民」への言及は、事例13同様、子売りへの言及があったことを示すものと思われる[ADART 1: 107の英訳も参照]。事例3については前後の時期の『日誌』に記載された大麦やナツメヤシの対価を参照することができる。van der Spek [2005]によると、飢饉の記録がある前374/373年の『日誌』には大麦の対価は記されていないが、ナツメヤシの対価はⅫ月に66リットルという数値が残っており、前380/379年Ⅺ月には90リットルなので、これに比べるとやや低下している。ただし前373/372年Ⅹ月には84リットルとなっており、この年には対価が回復したともいえる。一方、大麦の前373/372年の対価は1シェケルあたり39リットル[-372A Col. iii 15’; Ⅵ月]から24リットル[-372E Rev. 9’; Ⅺ月]である(1 qa=1リットルと換算)。その直近の記録で残っているのは前376/375年Ⅺ

7) グレイソン[ABC: 262]はルサブをニシビスのすぐ北のラサッパ(Raṣappa)のこととしている。Zadok [1985: 263]はグレイソンに依拠するが、Parpola & Porter [2001: Gazetteer 15]はRaṣappaをレサファに同定しており、同地はニシビスの南西になる。

8) 月食が前7世紀以降のアッシリアやバビロニアの占星術で王に対する、そして個人に対する凶兆とみなされていたことは、三津間 [2019a: 120-123] 参照。

月の対価で、1 シェケルあたり 77-79 リットルである [-375B Rev. 8; 数値は van der Spek 2005 にしたがう]。これと比較すると、前 373/372 年Ⅻ月の大麦対価は 3 分の 1 程度に減少しており、価格としては約 3 倍高騰していることになる。

前 373/372 年の大麦価格の高騰は、前 374/373 年の飢饉の影響が翌年にまで及んだことを示すのかもしれない。前年の大麦の収穫に問題があれば、それは種もみの減少をもたらし、翌年の収穫にも影響を与えるからである [Pirngruber 2014: 171-172]。ハックルとビルングルーバーはこの飢饉の原因（の一部あるいは悪化要因）を失敗に終わったエジプト再征服のようなハカーマニシュ朝の軍事行動に求めている [Hackl & Pirngruber 2015: 122; Pirngruber 2017: 190 も参照]。軍の招集による耕作地の荒廃や糧食の徴発といった事態が飢饉を招いたり悪化させたりしたのかもしれない。またナツメヤシの対価低下が前 373/372 年に及んでいないことは、軍の招集や徴発が大麦畑や大麦の収穫に特に影響を与える形で行われたことを示しているのであろう。

事例 5 や 6 は記録がある前 347/346 年の翌年の飢饉の兆候を示すように思われる。後者に見える *samānu* は大麦を犯す害虫または麦角病のような病気である [CAD, S: 112]。『日誌』 [-346 Rev. 30] にはⅫ月 27, 28, 29 日に蝗が襲撃したことが記録されており、事例 6 の *samānu* は前 347/346 年の収穫期にあった病害を示すのではなく [Pirngruber 2014: 169-170 はこの可能性を強く示唆するが]、翌年の収穫に影響を与えそうな、Ⅻ月末の蝗のことを指しているのかもしれない。事例 6 の時期の表示は「同年 MU BI」というもので、前 347/346 年のどの時期に *samānu* が発生していたかは明示されていない。しかし事例 6 はⅫ月のセクションの末尾に書かれている。Ⅻ月の終わりごろか、それ以降に書かれたものであることは確実に、Ⅻ月末の虫害を記述している可能性は十分にある。また事例 5 は同じⅫ月の渇水（あるいは春先のユーフラテスの増水不足）を伝えており、これも翌年の収穫に打撃を与えそうな事件である。実際、前 347/346 年後半の大麦の対価は van der Spek [2005] によれば 1 シェケルあたり 102-120 リットルで推移しており、Ⅻ月初めにも 120 リットルを記録していたが、Ⅻ月末には 69 リットルという対価が現れる [-346 Rev. 31]。この急激な対価の低下は渇水や月末の虫害で収穫の見込みが悪化したための対価の下落（価格の上昇）と解釈することもできる。ビルングルーバーは蝗害が大麦価格に著しい影響を与えたとみているが [Pirngruber 2014: 169-170; Pirngruber 2017: 164-165]、渇水も —— この年のⅫ月はユリウス暦の前 346 年 3 月に相当し [ADART 1: 152]、春の洪水期を 4-5 月ととらえるなら [Huijs, Pirngruber & van Leeuwen 2015: 136-137 参照]、その少し前ではあるにせよ —— 少なくとも増水不足の兆しは感じられて翌年の収穫見込みに影響し、大麦の買い占めなどを惹起したのではないかと思われる。翌年の大麦対価が気になる所であるが、前 346/345 年の『日誌』は得られていない。ハカーマニシュ朝時代のものと見られる対価リスト [Slotsky & Wallenfels 2009: Text 1] の年代は、暦から判断する限りアルタクシャサⅢ世の治世 11 年（前 348/347 年）から治世 15 年（前 344/343 年）になる可能性もあるが、その場合前

347/346 年に当たる治世 12 年の対価の数値は『日誌』と大きく異なっており、この年代との対応は否定される [Slotsky & Wallenfels 2009: 43-44, 44n43]。記録された値が 1 ミナあたりの対価というスロツキーらの判断を受け入れると [Slotsky & Wallenfels 2009: 43], 1 シェケルあたりに換算して 18-33 リットルという低水準であり、事例 5 や 6 の考察には用いたい。

事例 7 に見える「大麦のパン」という語を含むフレーズはニップルの原本由来の新アッシリア書体暦文書 [CT 4: 5-6=Bu 88-5-12, 11 Rev. 7] にある。そこには NINDA *še-am* KI^𒀭KANE GU^𒀭*-ma* KAŠ NAG「大麦のパンと焼き肉を彼に食べさせビールを飲ませよ」と書かれている。これは王が月食時に厄除けのために摂る儀式的食事で [CT 4: 5-6 の解説・翻字・英訳は Koch-Westenholz 2001: 75-77 参照], 王にはふさわしくない質素な食事に見える [ダリー 2010: 92-93 に訳されたヤスマハ・アッドウヤジムリ・リムのメニューと比較せよ]。「大麦のパン」を貧しい食事、あるいは庶民的な食事のメニューとすれば、事例 7 の「大麦のパンのごときパン」はさらにその代用品ということになる。儀式の際の食事が事例 7 に言及されていると考えても、『日誌』にわざわざ記録されるということは何らかの異常な状況を示している可能性が高く、例えば大麦のパンが手に入らずその代用品で儀式を行ったというような事態も想定される。前 343/342 年 I 月 22 日はちょうど収穫期かその直前に当たるので、やはりこの時の大麦の収穫も不調であったのかもしれないし、大麦の収穫前で前年の収穫分が底をついたことを示すのかもしれない。残念ながら、前 343/342 年やその前年の『日誌』には大麦の対価は記されていない。対価リスト [Slotsky & Wallenfels 2009: Text 1] も先述のような問題があるため、この時期の記録として扱えそうにない。しかし事例 7 が食糧危機を示すと考えた場合、その時代背景として、この時期はハカーマニシュ朝がエジプト再征服を成し遂げた前後であったことが指摘できよう [Pirngruber 2017: 190 参照]。この頃に西方からの帰還兵がバビロンに到来していたことが Diodorus Siculus [16: 51: 3] からうかがえる。シドンからの捕虜はすでに前 345/344 年にバビロンに入っていたことが年代誌 [ABC: Chronicle 9] から知られる。それに引き続く一時的な大麦の需要増に対応するため、代用食が出回った可能性が想定される。

事例 10, 11 はバビロンがアレクサンドロス大王の征服を経た後のもので、いわゆる「ディアドコイ年代誌」にある大麦の対価の記録である。同資料を含む「後期バビロニア年代誌」は地上の事件の記録をもっぱら記録する史料で、通常は対価は記録されないもので、これらはよほど特筆すべき数値とみなされたのであろう。アレクサンドロス治世末期の前 325/324 年 II 月初めには、バビロンの街路で大麦その他の取引が途絶えたことが記録される [事例 8]。そして大王が亡くなった前 323/322 年の後半からその翌年と、前 310/309 年から前 308/307 年までの期間、大麦の対価は 10 リットル代かそれ以下という低水準で推移しているが、1 *sūt* (6 リットル) はその中でも最低の値である。この事例 10, 11 はバビロニアにおけるアンティゴノスとセレウコスとの争い [Boiy 2007: 147] の影響で大麦が特に高い値

段で取引されたことを示している [特に事例 11 について van der Spek 2000: 301-303 参照]。ただし 1 sūt というのは切りのよい値であり、象徴的な、そしてやや誇張的な概数なのかもしれない [Pirngruber 2017: 35 も参照]。『日誌』では前 309/308 年 I 月の新麦の価格として 13.5 リットルという数値が見えている [-308 Obv. 17]。

事例 13 は本来前 274/273 年の後半をカバーする『日誌』[-273B] の末尾に記載された、前 275/274 年 XII 月の記録の一部である。日付などは欠損のため不明確であるが、前後の記事はいずれも「同年」という表示から始まっているので [-273B 'Rev. 38'-Upper e. 1]、この記事も前 275/274 年中の継続的な状況を記しているのであろう。さらに、『日誌』[-273B 'Rev. 26'] に記載されている前 274/273 年 XII 月の大麦対価は 36 リットルである。『日誌』では同時代の年末ごろの大麦の対価として、前 279/278 年 XI 月には 156 リットル [-278B 'Rev. 14']、前 277/276 年 XI 月には 96 リットル [-276 'Rev. 7']、前 271/270 年 XII 月には 99 リットル [-270B 'Rev. 9'] という数値が記録されており、これらと比較すると 36 リットルは 4 分の 1 から 3 分の 1 の低水準である。前 275/274 年の飢饉が種もみの不足などを招き、翌年の大麦の収穫にまで影響を及ぼしたことが推測される。

さらにこの飢饉は疫病も伴っており、『日誌』[-273B Upper e. 1] には前 275/274 年に *ekketu* 病が、おそらくバビロニアにおいて起こったこと、[-273B 'Rev. 33'] には前 274/273 年に *ekketu* 病が「邦」(アッカド=バビロニア)において蔓延したことが書かれている。前 275/274 年 XII 月にバビロニアでは第 1 次シリア戦争 (前 274-271 年)⁹⁾ に備える戦時課税措置 [-273B 'Rev. 34'-38'; 三津間 2009: 105-106 に翻字、翻訳、注釈]、前 274/273 年 XII 月ー前 273/272 年 I 月にはシリアへの銀などの輸送や軍の集結と移動、東方のバクトリアから来た戦象の通過 [-273B 'Rev. 30'-32'; 三津間 2002: 39, 50n18 に翻字と翻訳] があった。おそらく銀が少なくなったため、バビロンや諸都市の市場では前 275/274 年から前 274/273 年にかけて、イオニアの(ティグリス河畔のセレウケイア発行の?) 銅貨で取引が行われた [-273B Upper edge 2; 'Rev. 33']¹⁰⁾。前 275/274 年の記録にのみ、銅貨に「精錬された」という形容詞が付いている (URUDU *zi-i-pi ép-sū*) のは、翌年には需要の増大によって低質の銅貨が増えたことを示しているのかもしれない。銀貨に代わる銅貨の流通は当時のバビロニアがいかに貨幣経済化していたかの証左である [貨幣経済化については Pirngruber 2017: 30 参照; イオニアの銅貨については Pirngruber 2017: 126-127 参照]。銀貨が減少すればその価値は上がり、大麦の購買力(対価)は上昇すると思われるが、前 274/273 年 XII 月の対価が

9) シリア戦争のクロノロジーは Walbank et al. [1984: 493-511] の年表を参照。

10) ファン・デル・スペクは-273B [Upper edge 1-2] にある *ekketu* 病とイオニアの銅貨による取引の記述が ['Rev. 33'] にも複製されていると見て、銀の不足はもっぱら前 274/273 年後半に起こったとするが [van der Spek 2000: 306]、デル・モンテ [Del Monte 1997: 33-34] のように直後に書かれたセレウコス紀元の年号を [37][?] と復元し、-273B [Upper edge 1-2] を前 275/274 年(セレウコス紀元 37 年) XII 月の記録の一部と見る方が妥当と思われる。

低水準なのは、それだけ戦時課税措置による耕地への負担が重かったことを物語っているように [van der Spek 2000: 307 参照]。一方ナツメヤシの対価は前 274/273 年Ⅶ月に 72 リットル、Ⅻ月に 90 リットルで、前 277/276 年Ⅺ月の 60-72 リットルに比べて多少上昇している。こちらには銀貨の減少によるデフレの影響が表れているかもしれない。

事例 14 は『日誌』には通常記録されることのない SUM^{sar} (*šūmū*) の対価が記録された例である。*šūmū* は CAD によれば「ニンニク」であり [Š/III: 298-300]、ボルガーはこれを受けて「玉ねぎ」または「ニンニク」としたが、いずれの訳語にも疑問符を付けている [Borger 2004: 310]。ADART [1: 355] の訳語は「レタス (salad)」である。いずれにせよ「鳥が多い」という記述にそのまま続けて記されているので、*šūmū* の対価は鳥の影響を受けて変動し、特異な値を示したことが記述されたものと思われる。前 271/270 年に鳥が異常に多くなって何らかの野菜かその葉を食い荒らし、そのせいで対価が低下したというような事態も想定される。ただし、前 271/270 年Ⅻ月の大麦の対価は先述の通り 99 リットルであり、これは同時代の水準と比べて低いとは言えない。年末近くの値で比較すると、第 1 次シリア戦争以前の前 277/276 年Ⅺ月の対価は先述の通り 96 リットル、第 2 次シリア戦争 (前 260-253 年) 時の前 260/259 年Ⅹ月の対価は 90 リットルである [-259 Obv. 3]。また年明けの数値としては、Slotsky & Wallenfells 2009: No. 3 [o. 5'-6'] に記録された前 265/264 年Ⅰ月の大麦対価が 54-60 リットルとなっている。大麦の対価は収穫期であるⅡ月ごろに向って低下することが予想されるが、前 271/270 年Ⅶ月の『日誌』には 102 リットルの大麦対価が記録されており [-270B Obv. 9]、Ⅻ月になっても 99 リットルなのでほとんど低下していない。ただしⅦ月の大麦対価を比較すると、前 262/261 年は 168 リットルで [-261C Obv. 8]、これに比べると前 271/270 年Ⅶ月の対価はだいぶ低い。前 271/270 年半ばの大麦対価が (同時代としては) 低水準で、同年末の大麦の対価に予期される低下がみられないのならば、この年の大麦の収穫は多少鳥害の影響を受けたが、年末にかけて他所からの移入などで供給が維持されたという事態が想定できるかもしれない [短期的な食糧不足が交易によって解消された可能性については van der Spek 2014, 251-252 参照]。ただしこの年Ⅻ月のナツメヤシの対価は 42 リットルで [-270B Rev. 9]、前 274/273 年Ⅻ月の対価、1 シェケルあたり 90 リットルに対して半分に低下している。こちらの方を鳥害の影響を示す記述と見ることもできよう。前 274/273 年は戦時下で銅貨で取引がされていた時期に当たり、先述のようにこの年Ⅻ月のナツメヤシ対価にはデフレの影響も考慮しなければならないとはいえ、その半分という前 271/270 年Ⅻ月の対価はかなり低いものと言える。ただし、新しいナツメヤシは秋に出回るが [Pirngruber 2017: 75]、ユリウス暦の 10 月にほぼ相当する [ADART 1: 354]、前 271/270 年Ⅶ月の対価は 72 リットル以上で、同じく 10 月にほぼ相当する [ADART 1: 346] 前 274/273 年Ⅶ月の対価は 72 リットルなのでこれと同等かそれ以上の水準である。鳥害がもしあったとしても、一年のどの時期にあったのかは不明確で、その評価は困難であるといえよう。事例 27 も「ニンニク」([SUM]^{sar}; ADART [3: 261] の訳語は garlic) 等の価格

高騰（対価低下）を伝える事例であるが、事例 28 などと関連させて論じるべきであろう。

事例 15 の事件は、前 262/261 年における、敵からの防御のための銀、金などの王宮への搬入の記事 [-261C 'Rev. 11'-12' の内容を一続きのものとして理解] と関連するかもしれない。何らかの内乱状態があり、それへの対処がされたのでであろう [Del Monte 1997: 38; Pirngruber 2012: 195; Pirngruber 2017: 201 参照]。先述のようにこの年Ⅶ月の大麦対価は高い数値を示しているが、それ以降の対価は不明のため、耕地の占拠や何者かの敵対行動の影響は今のところ評価できない。Ⅷ月の耕地占拠以後となるⅨ月のナツメヤシ対価も 150 リットルと高い水準であるが、耕地は占拠されたが果樹園には影響がそれほど及ばなかったということも考えられるので、これをもって耕地占拠の影響を推し量ることはできない。

事例 19 は van der Spek [2014: 252] や Pirngruber [2014: 173-174] によれば、アンティオコスⅣ世の東方遠征に向けた食糧徴発によって引き起こされた危機である。ハユスらによれば前 220-150 年頃は大麦やナツメヤシという主要産物の対価が明らかに高い時期であったが [Huijs, Pirngruber & van Leeuwen 2015: 128], 前 165/164 年Ⅶ月終わりの大麦の対価は 378.5 リットルと特に高水準であった [-164C 'Flake' 11'; この数値を大麦対価とする判断は van der Spek 2005 も参照]。これはピルングルーバーによれば戦争のための銀の徴収によるデフレのために生じた価格であるという。前 166/165 年Ⅴ月には大麦の対価 372 リットル、ナツメヤシの対価 666-677 リットルが記録されており、この時からデフレが発生していた可能性はある。前 165/164 年Ⅻ月の事例 19 は遠征軍による食料徴発によって大麦が市場から一時払底したことを示しているのかもしれない [Pirngruber 2014: 174]。翌年Ⅱ月初めの対価が 96 リットルと [-163A 'Rev. 5'], 前年に比して低水準であることも、おそらく遠征軍のための継続的な食糧供給の必要を反映している [van der Spek 2014: 252 も参照]。

事例 20 の各行のつながりは不明確であるが、-161A₁+A₂ 'Rev. 11' と 12' の内容を一続きの出来事として理解できるならば、民が何かを飲んだことが原因で何か（疫病？）が邦に蔓延したという事件になる。飲んだものや蔓延したものの具体的内容は、粘土板の欠損のため明らかではない。しかし事例 20 の記述の直後にある「同月、死体が道々に […]」という記述 [-161A₁+A₂ 'Rev. 12'] は蔓延したものによって大量死が起こったことを示唆するように思われる。

牛の病気は『日誌』に数度言及されている [事例 21, 23, 31, 32]。特に事例 31, 32 は *di'u* および *miqittu* という 2 種類の病が同年に広まったことを示している。

事例 22, 24 は、遠隔地で起こった飢饉への言及である。事例 22 はデメトリオスⅠ世の死とアレクサンドロス・バラスの王位篡奪につながった、両者の内戦に関わる記述 [-149A 'Rev. 3'-12'] の冒頭を為している。飢饉は「塩海 [沿いの] アンティオケイア」（オロンテス河畔のアンティオケイア）にデメトリオス軍が立てこもったために起きたものと解釈されている [この事件と飢饉の解釈については van der Spek 1997/1998: 168-169; Pirngruber 2012: 285-287 を参照]。また『日誌』 [-149B 'Rev. 10'-13'] はこの内戦の余波の可能性があ

る、王の軍勢や（おそらくティグリス河畔の）セレウケイア住民が関わる戦闘を伝えているが、この年の大麦やナツメヤシの対価は残っておらず、その面での影響は明らかではない。

事例 24 はスサやエラム地方での飢饉を伝えている。これはエラム方面から、おそらくウルクなどの諸都市に略奪者が襲来したこと [-137A 'Rev.' 5'-6'] と同じ前 138/137 年 IV 月に起きており、記述の順番は前後するが、事例 24 のスサやエラムでの飢饉が原因となってこの方面からバビロニアに略奪者が襲来した可能性も十分にある。さらに事例 23 も同月であり、またセレウコス朝のデメトリオス II 世がバビロニアに反攻して捕縛されたのもこの月なので [-137A 'Rev.' 8'-11'; 解釈は Slotsky & Wallenfels 2009: 94-95 参照]、非常に混乱・錯綜した状況といえる。バビロン周辺の大麦対価は、『日誌』では II 月 84 リットル [-137A 'Obv.' 13]、III 月 72-81 リットル [-137B 'Rev.' 16]、V 月 75 リットルと [-137C 'Obv.' 17]、肝心の IV 月の対価は残っていないが、対価リスト [Slotsky & Wallenfels 2009: Text 6 o.33', 36'-37', 39'] には II 月 72 リットル、III 月 72-87 リットル、IV 月 72-75 リットルという数値が残っている。これらを合わせて考えると問題の IV 月周辺で対価には大きな変動が生じていないと言える。もっともピルングルーバーが指摘するように [Pirngruber 2014: 176-177] 前 144/143 年から前 130/129 年までの大麦対価は概ね 100 リットル以上で推移している。一方、前 138/137-137/136 年は 50-100 リットルの水準になるので、戦乱が多少対価に影響を及ぼしていると言えるかもしれない。またナツメヤシ対価は前 138/137 年は概ね 300 リットルかそれ以上であるが、XII 月に 210 リットルを記録し、前 137/136 年後半は 250-300 リットルの水準になるので、こちらにも戦乱の影響が多少表れているのかもしれない。

事例 26 もエラムの収穫に関するものであり、事例 28 はペルシア湾岸の王国メセネの王アスパシネー（在位？-前 124/123 年）の軍勢と思しき略奪者の襲来を伝えている。前 126/125 年からバビロニアでは「アラブ」と呼ばれる集団の活動が活発化し、その様子は『日誌』 [-125A 'Obv.' 21] などに記録されている。『日誌』の大麦対価は前 120 年代半ばに低水準を示し [春田 1998: 188, 191n18; Pirngruber 2016: 351, Fig. 1]、それは「アラブ」の度重なる襲撃や前 127/126 年にバビロンを占領していたメセネ王国（やその王アスパシネー）の脅威によって説明できるとされる [Pirngruber 2016: 350]。『日誌』のナツメヤシ対価も前 120 年代半ば以降は 100 リットルを下回ることが珍しくなくなる。事例 28 のように収穫物を持ち去ったかに見える行為も前 120 年代半ばの食糧危機の原因の一角をなしていたかもしれない。事例 27 の「ニンニク」などの高騰もこの危機の一部としてとらえられる。また対価リスト [Slotsky & Wallenfels 2009: Text 8] は前 127/126-122/121 年の大麦対価を記録し、前 124/123 年 XI 月の 69 リットルを除けば、15-45 リットルという水準である [Slotsky & Wallenfels 2009: 117-119; この要約の同年 X 月の数値は 36(+) と修正すべきである]。また対価リスト [Slotsky & Wallenfels 2009: Text 9] も前 126/125-125/124 年の大麦対価を記録し、1 シェケルあたり 15-51 リットルという数値を示している [Slotsky & Wallenfels 2009: 136-140; 数値の修正は Pirngruber 2015: 381 参照]。ただし前 125/124 年 V 月初めの対

価は粘土板の表記通りとすると 74 シェケルとなる [Slotsky & Wallenfels 2009: Text 9 r. 5']。

事例 29 には事例 6 同様、収穫期の大麦に *samānu* がついたことが記録されている。これは -122A の I 月のセクションの末尾に記録されたものである。前 123/122 年 I 月の大麦の対価は van der Spek [2005] によれば 63 リットルから 72 リットル強であるが、II 月の『日誌』の記載によれば 57 リットルから 51 リットルへと低下する [-122B 'Obv.' 8]。同所には新しい大麦の対価も記載されているが、数値は欠損している。しかし III 月の大麦対価は 90 リットルに上昇しているので [-122C 'Obv. 12']、この *samānu* による害は大きな影響を及ぼさなかったと判断できる。VI₂ 月には 45 リットルという対価も見えているが [-122D 'Rev.' 7]、これは明らかに、同月の『日誌』に記録された、「アラブ」によるアッカド全土封鎖、バビロン包囲という事件の影響であろう [-122D 'Rev.' 9'-10']。対価リスト [Slotsky & Wallenfels 2009: Text 8] は VIII 月から XII 月にかけて 45-40 リットルという大麦対価を記録している [Slotsky & Wallenfels 2009: 119]。

事例 30 は炒った大麦（麦こがし？）やパンに関する事件と見られ、当時の食糧事情の悪さを示唆するのかもしれない。前 118/117 年のナツメヤシ対価は 160-170 リットル台と悪い数値ではないが、大麦対価が残っていないために詳しい状況はわからない。しかしこの年 VII 月の『日誌』にも「アラブ」への断片的な言及があり [-117B 'Obv.' 4]、これが腐ったりカビが生えたような食料も手に取らざるを得ない状況を作った可能性は否定できない。

事例 36-38 は前 108/107 年に起こった諸事件で、38 は 37 に含まれるものとも考えられる。特に事例 36 が衛生危機と結びついていたことは別稿で論じている [三津間 2021: 115-116]。事例 33 から 45 までと 48 はほぼ前 100 年代から前 1 世紀第 1 四半期の事例で、この時期の事例は水に関するものがほとんどである。日照りや渇水（あるいは春先の洪水の遅延かその前兆）とみられる事態がしばしば起こり（事例 37, 38, 42, 44, 48）、事例 41 や 43 は水質の悪さを示唆する。ハユスらは前 160-80 年頃の気温上昇やそれに伴う前 180-80 年のユーフラテスの水位上昇を明らかにしている [Huijs, Pirngruber & van Leeuwen 2015: 134; 136]。しかし水位の上昇は『日誌』の月単位の水位記録を年単位に変換したグラフ [Huijs, Pirngruber & van Leeuwen 2015: 136, Fig. 7.6] から読み取れるものであり、これを月単位とした場合、アルシャク朝時代初期の前 139-70 年の水位は各年の 1-5 月（大麦の成長・収穫期）では、各月とも前 220-140 年と比べて明らかに低い¹¹⁾。大麦の成長期における水位の低下という現象には¹²⁾、人為的な原因を考慮すべきかもしれない。シルトの堆積（事例 33）、

11) Huijs, Pirngruber & van Leeuwen [2015: 136-137, Fig. 7.7]。前 220-150 年頃は、大麦やナツメヤシという主要産物の対価が明らかに高い時期であったとハユスらは述べている [Huijs, Pirngruber & van Leeuwen 2015: 128]。それにもかかわらず [Fig. 7.7] で前 140 年と 139 年の間に時期の区分があるのは、アルシャク朝支配の開始に合わせたものであろう。

12) ハユスらは寒冷な時期には冬に雪解け水が少なく春先の増水が多いと推測し、これを敷衍すれば前 139-70 年という温暖な時期には冬の雪解け水は多く春先の増水は少ないことになるが、Huijs, Pirngruber & van Leeuwen [2015: 137, Fig. 7.7] は明らかに、春先の増水に先立つ 1-3 月

渇水や魚の減少（事例 39）に関係しそうな営みとして、前 110-100 年代の『日誌』に表れるクタ上流の（？）「新運河」[-118A Obv. 20; -109A 'Obv. 12: *ÍD eš-šú AN.TA r^{uru}GÚ.1* [DU₈.A^{ki?}]] の開削や、前 90 年代にユーフラテス河畔のセレウケイア [Lendering 2020 はシッパルかネハルデアの可能性を示唆] の上流の郊外側で行われた「第 2 の運河」の掘削 [-93A Rev. 11-13; -93A Rev. 24f.] が挙げられる。当時のバビロニア周辺では居住地が増大して人口が膨張し [Pirngruber 2017: 26-27]、ディヤラ河下流域ではセレウコス朝、アルシヤク朝時代に居住地の広範な拡張と多くの新都市の形成が認められる [Adams 1965: 58-68]。またニッブルやウルクを含む両河中下流の平原中央部でも居住地の増大が著しい [Adams 1981: 178, Table 15]。このような状況で水や魚の需要が増して新規の導水が行われ、水不足がしばしば引き起こされた可能性は大いにあるのではないと思われる。

お わ り に

本稿では『日誌』やその関連史料に表れる食糧危機の事例 48 例を抽出して表にまとめ、個々の事例を分析してきた。「飢饉」という言葉が明示されているのは事例 1, 2, 3, 13 である。事例 1, 2 の飢饉は、アッシリアの首都ニネヴェが陥落し、新バビロニアが宿敵を打倒しつつある時期の出来事ではある。しかしこの記録は、例えば食糧生産に従事する人員の出征、遠征軍への食糧供給、さらに捕虜の流入などといった形で、バビロニアでも食糧不足が起こっていたことを推測させる。戦争は征服される側だけではなく、征服する側にも負担を強いずにはおかなかった。

事例 3, 13 については前後の時期の大麦対価が比較材料として利用できたが、飢饉後の数値はいずれも翌年の収穫期を経た後のものであった。事例 3 は飢饉が前 374/373 年Ⅻ月にあり、39 リットルという大麦対価が翌年Ⅵ月、24 リットルが翌年Ⅺ月の『日誌』に記録されていた。事例 13 の場合飢饉は前 275/274 年にあり、翌年Ⅻ月の『日誌』に対価 36 リットルが現れる。これらは飢饉が記録された時期の状況を十分に反映したものではなく、飢饉の時の大麦対価より上昇している可能性は否定できない。ただし、24 リットル、36 リットルという数値を同時代、同時期（季節）の数値と比較してみると、やはり低い対価であることは明らかで、飢饉後のなお危険な状況を示唆する数値といえる。ただしナツメヤシの対価は、事例 3 の場合には飢饉と同時期に低下を見せているもののその程度は小さくなく、また事例 13 の場合、飢饉翌年のナツメヤシ対価はデフレの影響を受けて上昇していたように思われる。

「飢饉」という記述は見られないものの、さらに危険な状況と思われるのは、アレクサンドロス大王没年から翌年にかけてと、セレウコス帰還後のバビロニアでの戦いの時期で、こ

↘ であっても前 220-140 年の方が水量が多いことを示している。

の時期の大麦対価は 10 リットル代かそれ以下である。特に、通常は対価を記録することのない「バビロニア年代誌」が、前 310/309-309/308 年に 6 リットル (1 sūt) という (象徴的な?) 低水準の対価を特記したことは (事例 10, 11), この時期の食糧危機の異常な深刻さを物語る。価格による危機の暗示は、『日誌』では通常価格リストには示されない作物の価格や高値を示すという方法で為されたものと思われる。今回扱った事例 14 や 27 がそれである。特に後者は「アラブ」による脅威が始まった時期の記述であり、大麦等の価格の高騰とも連動している。やはりかなりの危機的な状況が、普段言及されない作物の価格への言及という方法で表現されているといえよう。このように、「飢饉」といった直接的な言葉が用いられない事例においても、時代背景や通常示される作物の価格などから判断して、危機が表現されていると判断できることがある。

バビロニアや都市バビロンにおいて支配王朝の交代という出来事と食糧危機の記述される時期とは、必ずしも一致しない。例えば事例 1, 2 はアッシリアのバビロニア支配が覆される時期ではなく、戦場がアッシリアに移った後の飢饉である。ペルシアによる新バビロニア滅亡の時には都市バビロンは抵抗なく開城しており、飢饉なども起こっていないように年代誌 [ABC: Chronicle 7: iii 5-28] からは読み取れる。一方、事例 3 の飢饉は、バビロニアでの戦乱が原因ではなく、ハカーマニシュ朝のエジプト再征服という他地域での軍事行動が原因または悪化要因と見られる。またアレクサンドロスのバビロン入城はペルシア支配の終焉を告げる出来事であったが、この時の『日誌』には戦闘の記述は見られず、飢饉などを思わせる記述もない [-330A (+) B 'Rev.' 3'-14']。アレクサンドロス死後の長期の食糧危機はディアドコイの間でバビロニアの支配権が争われる中での出来事と言えるが、セレウコス朝のバビロニア支配が安定した前 275/274 年にも飢饉は起きている。この年は銅貨で取引が行われたり、年末には戦時課税が行われたりする等、第一次シリア戦争へ向けて社会への圧力が高まっていた。飢饉はこういった状況のなかで翌年の大麦の収穫にも影響を及ぼした。また前 141/140 年Ⅲ月にバビロンの支配はセレウコス朝からアルシャク朝へと移るが、この時の『日誌』は特に戦闘や混乱は伝えていない [-140A 'Rev. 1'-9']、バビロニアや都市バビロンにより深刻な影響をもたらしたのは前 120 年代からの「アラブ」の脅威であり、それによって食糧危機が起こる。さらに人口増に伴う活発な導水により、水の供給にも前 100 年代から何らかの問題が生じたようである。

今回の検討を通じて明らかになったことは、社会危機、食料危機は王朝交代という政治的な大変動以外の時期にも発生するということであろう。バビロンで戦いがあった前 310/309 年から翌年にかけての食糧危機 (事例 10, 11) や「アラブ」というラクダ遊牧民による動乱が引き起こした食糧危機は理解しやすいが、バビロニア外での戦争が原因・悪化要因となった食糧危機、人口増が原因とみられる水供給の問題などは、支配勢力の苛斂誅求や社会基盤のぜい弱さが生んだものであり、天候や外敵ではなく支配勢力や社会そのものの問題としてとらえなければならない。これは外的要因のみに危機の原因を帰すことがいかに一面的

であるかを我々に示すもので、現代の危機についての分析にも当てはまる教訓と言える。

略号表

- ABC: A. K. Grayson (1975) *Assyrian and Babylonian Chronicles*. Locust Valley, NY.
- ADART: A. J. Sachs, & H. Hunger (1988–2022) *Astronomical Diaries and Related Texts from Babylonia* 1–7. Vienna.
- BCHP: I. L. Finkel, & R. J. van der Spek (2006) *Babylonian Chronicles of the Hellenistic Period*.
Livius.org (<https://www.livius.org/sources/about/mesopotamian-chronicles/>; 現在は翻訳のみ提供), Scholarly Edition.
- BM: 大英博物館所蔵品 (主に粘土板)
- CAD: A. L. Oppenheim, E. Reiner, et al. (eds.) (1956–2010) *The Assyrian Dictionary of the Oriental Institute of the University of Chicago*. Chicago.
- CDA: J. Black, A. George, & N. Postgate (eds.) (2000) *A Concise Dictionary of Akkadian*, 2nd (corrected) printing. Wiesbaden.
- CT: *Cuneiform Texts from Babylonian Tablets in the British Museum*

参考文献

- Adams, Robert McC. (1965) *Land behind Baghdad: A History of Settlement on the Diyala Plains*. Chicago.
- Adams, Robert McC. (1981) *Heartland of Cities*. Chicago.
- Boiy, T. (2007) *Between High and Low: A Chronology of the Early Hellenistic Period*. Frankfurt am Main.
- Borger, R. (2004) *Mesopotamisches Zeichenlexikon*. Münster.
- ダリー, ステファニー (大津忠彦, 下釜和也訳) (2010) 『バビロニア都市民の生活』 同成社.
- Del Monte, G. F. (1997) *Testi dalla Babilonia Ellenistica* 1, *Testi Cronografici*. Pisa.
- Hackl, J. & R. Pirngruber (2015) Prices and Related Data from Northern Babylonia in the Late Achaemenid and Early Hellenistic Periods, c. 480–300 BC. In: R. J. van der Spek, B. van Leeuwen & J. L. van Zanden (eds.) *A History of Market Performance from Ancient Babylonia to the Modern World*. London, 107–127.
- ハラリ, ユヴァル・ノア (柴田裕之訳) (2018) 『ホモ・デウス (上): テクノロジーとサピエンスの未来』 河出書房新社.
- 春田晴郎 (1989) バビロン天文日誌からみた大麦等の価格推移『西南アジア研究』 31, 81–90.
- 春田晴郎 (1998) アルシャク朝パルティアの一次史料: バビロン天文日誌第3巻の公刊『オリエント』 41(2), 181–193.
- Hoyland, R. G. (2001) *Arabia and the Arabs*. London.
- Huijs, J., Pirngruber R. & van Leeuwen B. (2015) Climate, War and Economic Development: The Case

- of Second-century BC Babylon. In: R. J. van der Spek, B. van Leeuwen & J. L. van Zanden (eds.) *A History of Market Performance from Ancient Babylonia to the Modern World*. London, 128-148.
- Hunger, H. & Pingree, D. (1999) *Astral Sciences in Mesopotamia*. Leiden.
- Koch-Westenholz, U. (1995) *Mesopotamian Astrology: An Introduction to Babylonian and Assyrian Celestial Divination*. Copenhagen.
- Koch-Westenholz, U. (2001) Babylonian Views of Eclipses In: R. Gyselen (ed.) *Démons et merveilles d'Orient*. Bures-sur-Yvette, 71-84.
- 古谷野晃 (2004) 灌漑 日本オリエント学会編『古代オリエント事典』岩波書店, 429.
- Leichty, E., Finkel, I. L. & Walker, C. B. F. (2019) *Catalogue of the Babylonian Tablets in the British Museum* IV-V. Münster.
- Lendering, J. (2020) Seleucia on the Euphrates. Livius.org (<https://www.livius.org/articles/place/seleucia-on-the-euphrates/>), last modified August 14, 2020.
- 三津間康幸 (2002) セレウコス朝及びアルシヤク朝支配下のバビロニアにおける將軍職『オリエント』45(2), 26-55.
- 三津間康幸 (2004) セレウコス朝及びアルシヤク朝支配下のバビロニアにおける知事職『オリエント』47(2), 80-101.
- 三津間康幸 (2009) セレウコス朝時代のバビロンにおける神殿監督職『聖書学論集』41, 103-118.
- Mitsuma, Y. (2010) The Dating of a Military Operation by the “General above the Four Generals” *Nouvelles assyriologiques brèves et utilitaires* 2010(4), 109.
- 三津間康幸 (2017) アッカド語楔形文字文書「後期バビロニア年代誌」と『バビロン天文日誌』の関係『歴史学研究』964, 35-45.
- 三津間康幸 (2019a) 古代メソポタミアの占星術に見る人間の生と死『死生学年報』2019, 119-134.
- Mitsuma, Y. (2019b) The Relationship Between Greco-Macedonian Citizens and the “Council of Elders” in the Arsacid Period: New Evidence from Astronomical Diary BM 35269+35347+35358. In: J. Haubold, J. Steele, & K. Stevens (eds.) *Keeping Watch in Babylon: The Astronomical Diaries in Context*. Leiden, 294-306.
- 三津間康幸 (2021) 『バビロン天文日誌』に見る衛生危機・社会危機『都市文明の本質』3, 113-116.
- 岡田明子 (2004) ナツメヤシ 日本オリエント学会編『古代オリエント事典』岩波書店, 642.
- Parpola, S. & Porter, M. (2001) *The Helsinki Atlas of the Near East in the Neo-Assyrian Period*. The Neo-Assyrian Text Corpus Project.
- Pirngruber, R. (2012) The Impact of Empire on Market Prices in Babylon in the Late Achaemenid and Seleucid Periods, ca. 400 - 140 B. C. Ph. D. Dissertation, Vrije Universiteit Amsterdam.
- Pirngruber, R. (2014) Plagues and Prices: Locusts. In: H. D. Baker, & M. Jursa (eds.) *Documentary Sources in Ancient Near Eastern and Greco-Roman Economic History: Methodology and Practice*. Oxford, 163-186.
- Pirngruber, R. (2015) review of A. L. Slotsky & R. Wallenfels (2009) *Tallies and Trends*. Bethesda.

- Archiv für Orientforschung* 53, 378-381.
- Pirngruber, R. (2016) 'Arabs' in Late First Millennium BCE Babylonia. In: M. Luciani (ed.) *The Archaeology of North Arabia: Oases and Landscapes*. Vienna, 345-353.
- Pirngruber R. (2017) *The Economy of Late Achaemenid and Seleucid Babylonia*. Cambridge.
- Rochberg-Halton, F. (1991) The Babylonian Astronomical Diaries. *Journal of the American Oriental Society* 111 (2), 323-332.
- Rochberg, F. (2004) *The Heavenly Writing*. Cambridge.
- 佐竹明 (2009) 『ヨハネの黙示録』中巻 新教出版社.
- 聖書協会共同訳 (2018) 『聖書：旧約聖書続編付き』日本聖書協会.
- Slotzky, A. L. & Wallenfels, R. (2009) *Tallies and Trends: The Late Babylonian Commodity Price Lists*. Bethesda.
- van der Spek, R. J. (1997/1998) New Evidence from the Babylonian Astronomical Diaries Concerning Seleucid and Arsacid History. *Archiv für Orientforschung* 44/45, 167-175.
- van der Spek, R. J. (2000) The Effect of War on the Prices of Barley and Agricultural Land in Hellenistic Babylonia. In: J. Andreau, P. Briant & R. Descat (eds.) *Économie antique: La guerre dans les économies antiques*. Saint-Bertrand-de-Comminges, 293-313.
- van der Spek, R. J. (2005) *Commodity Prices in Babylon 385-61 BC*. Amsterdam (<https://iisg.nl/hpw/babylon.php>).
- van der Spek, R. J. (2014) The Volatility of Prices of Barley and Dates in Babylon in the Third and Second Centuries BC. In: H. D. Baker, & M. Jursa (eds.) *Documentary Sources in Ancient Near Eastern and Greco-Roman Economic History: Methodology and Practice*. Oxford, 234-259.
- Vargyas, P. (2001) *A History of Babylonian Prices in the First Millennium BC 1, Prices of the Basic Commodities*. Heidelberg.
- Veenhof, K. R. (1975-1976) An Old Akkadian Private Letter: With a Note on *šīāḫum/šīḫtum*. *Jaarbericht Ex Oriente Lux* 24, 105-110.
- Walbank, F. W. et al. (eds.) (1984) *The Cambridge Ancient History*, second edition 7 (1), *The Hellenistic World*. Cambridge.
- Zadok, R. (1985) *Geographical Names According to New- and Late-Babylonian Texts*. Wiesbaden.
- Ziegler, S. (1998) *Ptolemy Geography*, Book 6. *Middle East, Central and North Asia, China 1, Text and English/German Translations*. Wiesbaden.